

虎ノ門金刀比羅宮

縁起の栞



当宮御神紋



表紋



蔭紋

崎 軒 志 縁 起

御 由 緒

一、祭神 おおものぬしのかみ 大物主神

はいし 配祀 崇徳天皇

一、大祭 十月九日十日

一、祭日 毎月九日十日

当宮は虎ノ門金刀比羅宮と称し、東国名社の一つ。創祀は万治三年（一六六〇年）丸

亀藩主京極高和、讃岐金刀比羅大神をその邸内に勧請したるものにして、虎ノ門金毘

羅大権現と称せらる。爾来毎月十日市民の要請に応え、邸内を開き群参を許せりと

言う。明治二年四月神祇官の沙汰を蒙り事比羅神社と社号改称、同四年六月京極家所有地と社地を分割し、次いで同六年三月八日府社に列す。明治二十二年九月七日金刀比羅宮と改称現在に至る。明治七年三月十四日一品有栖川宮熾仁親王御参拝、明治十七年十月二十七日大正天皇明宮にましませし時親しく御立寄り御拝あらせられたり。明治四十年五月四日神饌幣帛料指定。

社殿は本殿、幣殿、拝殿、神楽殿、舞楽殿、社務所、講堂、東門、西門、中門あり。御神徳は五穀豊穰、殖産興業、大漁満足、海上守護の神として、とりわけ招福除災の尊信熾烈なれば、信徒は全国海外に亘り社頭また賑盛を極むこと東都第一と称せらる。

御神徳

御祭神大物主神は、遠き神代に神光海上を照し、波の穂を踏みて御出現せられ給

いし神なり。後、和光同塵の御神意（和光同塵とは神が光を和らげて塵と交るとの御神意）をもつて讃岐国象頭山に跡を垂れ顕現し給いしより、神号を金毘羅大権現と称せられ、御神威は国内に輝き上下の尊信をあつむ。配神、崇徳天皇は鳥羽天皇の皇子に坐し、保元の乱の厄に遭い讃岐の国に遷らせ給いしより、金毘羅大権現を日夜尊崇せらる。長寛元年（一一六三年）、山上の巖頭に座し荒行し給う、同二年崩御、衆庶悼みて永万年（一一六五年）本宮相殿に配祀せり。爾来、いよいよ靈驗赫々として五穀豊穰、豊漁満帆、海陸安穩、万民太平の御神徳をもつて篤く信仰せらる。また当宮は江戸城裏鬼門の位地にありて、江戸城鬼門除けの神として鎮座す。社殿また正丑寅に面し慈悲荒神として破邪顕正なり。御祭神、金刀比羅大神は天神地祇八百万神の中、運を掌る神なりとも伝誦せられたり。運とは天運、人運、地運、就中人運最も尊く自ら戒しめ、自ら慎しみ、只管己れの心懸け次第により神の御加護をうけ運は自から開かれて行くと解すべく、又大物主神の御靈験につき「天神、我れ

一切貧窮無福の人の為大福德を為さん、若し家内に崇敬せば八万四千の福德神を遣さんと宣(のたま)ひたり」とあり、又一書に「この福德神を守り給ひ五大験あり、一、貧弱の人には福德を与え、二、疾病の人には療薬を与え、三、造悪の人には善心を与え、四、短命の人には延命を与え、五、愚癡の人には知慧を与う」とあるが如く此の五大験、顕かなれば開運福德守護の神として庶民に尊信さる。由つて当宮はかゝる縁起にもとづき神威あらたかなる開運のお守りを元旦と初金毘羅の正月十日に限り授与致す做(な)わしあり。あるいは押手(おしで)の誓と言ひて、酒を断ち禁煙を誓ひ、賭博を断つ、禁断(きんだん)の神文(しんもん)を律し給ひ、また福德守護の御神徳は上下庶民に宏大にして靈威顯著(れいゐけんちやく)たり。

当宮の信者は関東地区一円に分散し遠く関西九州または東北、北海道外に亘り、数百万を数えらる。毎月十日の賽者(さいしや)は、戦前三十万と称せられたり。特に、縁日商は当日、社前より北は溜池、南は新橋に連なり混雑を極む。当宮講社の団体数は銚

子大漁講を始め、その数約八百あり。戦前、縁日当日の都電の調査によれば、虎ノ門乗降客は二十三万と報ぜられ、米、酒、青物などの献物殿内を埋め、船舶各業、漁業農家を始め下町商家あるいは東都各三業の地に参者を有し、招福除災(しやうふくじふさい)家門繁栄の御神徳は当宮の御神紋丸金と共に御神性はいよいよ広く、今日も尚大衆の信仰に親しまれたり。尚、当宮は信徒の体験記録をかつて数千巻を集蔵せり。

御靈験の一端

一、御神紋丸金と葉団扇

江戸時代当宮の靈験極めて烈(はげ)しきため、庶民畏敬の念より「虎ノ門の金毘羅様には天狗(てんぐ)在(あ)す」との喧騒(けんそう)起れり。ために表紋丸金に対し蔭紋(かげもん)には天狗の葉団扇を用うることに、なる。この信仰は当宮のみに限られたり。因みに中央に劔を持たれ数百歳を数えらる老翁の御姿なる金刀比羅大神(ことりびらのおおかみ)在(あ)し、その周囲に無数のお使いひめの大天狗・

中天狗・小天狗・烏天狗が群従なしたる画像の掛軸諸々に拝したり。

一、京極家の御家騒動

京極若狭守高或^{たかもろ}家督^{かどく}を継ぎ藩主となりし頃、舎弟^{しゃてい}壱岐守高通^{はんとん}叛心を抱き毒害を企つ。

一夜金刀比羅大神高或の枕辺に現れ給い、悪を教え給う。高或畏みて神教に従い賊を糾明^{きうめい}し乱を未然^{みぜん}たらしむと言^いう。(遊歴^{ゆうれき}雜記)

一、金毘羅利生記

讃岐丸亀城主生駒将監剣道指南番田宮氏の一子坊太郎は、乳母お辻の水垢離^{みすごり}をとつての金毘羅大権現の利生により、父君の仇堀源太左衛門を討ち、めでたく宿恨^{しゆくん}を晴らしたるは、劇、浄瑠璃、講談に人の知るところなり。

一、江戸火消の初詣

大江戸の名残り町火消は維新後も昔を偲びて、毎年に出初式を祝えり。中にも第二消防組当宮を篤く信仰し、先ず参りて後、出初式に列するを例とせり。時に明治四

十二年各組梯子を競^{きそ}う、落死するものこ、かしこなり。第二消防組もまた落下す。

幸か奇蹟^{かきせき}か彼鳶^{かどひ}は再び猿のごとく上りて役を果せり。これ一重に大神の御蔭とし、由來^{ゆらい}市中全組の初詣を慣例として今日に及ぶ。

一、関東大震災

大正十二年大震災当日炎々^{えんえん}恹々、当宮を囲む、職員防火に努む。指揮に当る宮司葉室長通ふと空を仰ぐに、御本殿真上に一群の雲あり、雲上に銀白美髯^{ぎんぱくびぜん}一老翁^{おきな}大麻を手に火の粉を払う御姿を拝す。傍に侍^じす平野神職もまた共に拝せりと伝う。(当宮元宮司元伯爵葉室長通氏談)

昭和二十四年一月十日

東京・虎ノ門

金刀比羅宮宮司 吉田 正已 述

東国
總社

虎ノ門 金刀比羅宮

〒105 東京都港区虎ノ門一ノ二ノ七

TEL (三五〇一) 九二五五・九九二八

宮司 高見澤 一弘

昭和五十七年